

「やってみよう！」の人生

相原 道子

横浜市立大学名誉教授

はじめに

医学部入学から50年後に大学を去るまで、新しい立場に身を置く機会が巡ってくるたびに、できるかどうかではなく「やってみよう！」との思いで進む道を選択してきました。その結果、母校の教授に就任後は、病院長、学長、公立大学協会会長と想像もしなかった道を歩むことになりました。今回、そのときどきの思いを、励まし支えてくださった方々に感謝しながら振り返ってみたいと思います。

I. 学生時代・研修医時代

横浜の自由な空気の中で中学、高校生活を送った私は、社会に役立つ仕事、性別に関係なく活動できる仕事をしたいと思い、1974年に地元の横浜市立大学医学部に入学しました。当時の医学科は1学年わずか60名という小さな科でしたが、そのおかげで教員や同級生、上級生との距離は、卒業後も含め他学より近かったのではないかと思います。入学時、運動が苦手な私も一念発起して卓球部に入部しましたが、あまりの運動神経の鈍さに専門課程に入る前に脱落してしまいました。それでも当時の部活の先輩方は、その後私がキャリアを重ねていく間、心強いサポーターでした。専門課程では得られる情報を駆使して診断していく過程が面白く、卒業後の臨床研修では内科を中心にローテートすることにしました。

一方、選択的ローテート研修の間に研究の入り口も覗いてみたいと思い、当時の大らかさをいいことに、各研修先で希望を伝えてみました。その結果、病棟勤務はほどほどに透析室で患者データをまとめて医局で発表させてもらったり、原因不明の神経疾患症例の血中成分解析を衛生学教室でさせてもらったり、マクロアミラーゼ血症症例の血漿蛋白を病理学教室で解析し論文を書かせてもらったりと、いまでは考えられないほど自由な研修医生活を送っていました。

ところが、内科の合間に組み込んだ皮膚科研修で、急に皮膚科に興味が沸いてしまいました。当時教授だった永井隆吉先生が、皮膚をみることで全身の疾患や状態を知る重要性和面白さを教えてくださったからです。教室では教授のご専門である免疫アレルギー疾患の中でもとくに薬疹の研究が盛んで、私も研究室で池澤善郎先生、長谷哲夫先生、北村和子先生のご指導のもと薬疹症例のリンパ球培養や動物モデルを使つての感作実験等を行うことができました。これが薬疹研究との最初の出会いです。結果が何か出るたびに感動していましたが、先生方にはいま思うと冷や汗が出るくらいご苦勞をおかけしました。ちなみに、永井先生は厳しくも温かい方で、若い医師たちが夕方医局で論文を書いていると「おいしいお茶の淹れ方を教えてあげよう！」といって、来客用の高級なお茶を手ずから淹れてくださったことが懐かしく思い出されます。後年、私が小田原市立病院赴任が決まったとき、永井先生はすでに大学を退任されていましたが、便せん4枚に書かれた励ましのお手紙をいただき、それはいまも私の宝物です。

II. 皮膚科入局後

入局そして留学

研修期間が終了し、結局皮膚科に入局しましたが、新しい実験手技を身につけるため時間をみつけては免疫学教室に出入りしていました。

入局3年目には研修医時代に結婚した大学の同級生の夫が、西ドイツ(当時)のチュービンゲンにあるMax-Planck生物学研究所免疫遺伝学部門のJ. Klein教授のもとに2年間留学することになり、私も一緒に行くことにしました。その理由はネッカー川の流れる中世ドイツの美しい街並みの残る大学町に住んでみたかったから、そして日本ではできない経験をしたかったからです。永井教授からはJ. Klein教授宛てと



図1 医局員による還暦のお祝いの会にて(2016年)

チュービンゲン大学皮膚科のG. Rassner教授宛ての2通の紹介状をいただき、現地のドイツ語学校に2カ月ほど通った後、チュービンゲン大学皮膚科を訪れました。ろくにドイツ語を話せないにもかかわらず、教授外来や病棟回診、医局の勉強会、学生実習などに参加させてもらうことができましたが、お国柄から非常に権威的な診療科のありように内心とても驚きました。スタッフや学生から意見を求められることもしばしばありましたが、すべて日本で経験済みの症例だったこともあって診断に困ることがなかったのは幸いでした。

一方、研究所では抗原認識メカニズムの研究に加えてもらうことができ、大学の皮膚科を一通り見終わった後には研究所のみに通うようになりました。每晚10時ごろにはKlein教授による研究室の見回りと研究の進捗状況の確認があり緊張しましたが、教授のさりげない温かさに触れることができる時間でもありました。私の実験結果は、その後研究を引き継いだ研究者によって論文化されました。ところが、留学の最後に、思いも寄らない体験をすることになります。1986年4月、現在のウクライナにあるチェルノブイリ原発で事故が発生し、放射能を大量に含んだ灰が気流に乗って研究所のある南ドイツに降り注いだのです。テレビやラジオではアナウンサーが緊張した声で家から出ないようにと繰り返し、数日後も研究室や自宅の窓辺ではガイガーカウンターが鳴り続けました。あの重くのしかかるような時間の記憶は、いまでも鮮明に残っています。

余談ですが、後年Klein教授は米国に移られました。私が病院長のときに皮膚の診察を受けに尋ねていらしたことがありました。その際、教授の故郷であるチェコでの結婚披露宴にご招待いただき、ちょうど夏休み期間でしたのでその場でお受けしました。チェコでは、披露宴の数日後に教授がお気に入りのプラハの街が一望できる高台に私たち夫婦を案内してくださり、そこでいまのお気持ちやチェコで過ごした若い日のお話を伺ったことが忘れられない思い出です。

ドイツから帰国した2年後には、Klein教授の紹介でサンフランシスコの南にあるスタンフォード大学メディカルセンターに留学することになりました。夫は病理学のI. Weissman教授のラボ、私は血液学教室と連携した骨髄移植プログラムのK. G. Blume教授のラボです。Blume教授のラボは立ち上げたばかりで、教授がドイツ人であったことからドイツ人の若い医師が多く、家庭的な雰囲気の中で多剤耐性遺伝子をもつ悪性造血細胞の研究や骨髄移植後GVHDの発症メカニズムの研究などを担当しました。ところが再び留学中に災害に遭うことになります。1989年、サンフランシスコ大地震が起き、スタンフォード大学も被害を受けました。研究棟に貼られた立ち入り禁止の黄色いテープをかいぐって侵入し、長期培養中の骨髄細胞のボトルを維持するための作業をしたことは忘れられない経験です。その甲斐もあってか、2年間の留学で自分の名前のついた論文をスタンフォード大学から帰国後も含め6編ほど出すことができました。



図2 第80回日本皮膚科学会東京支部学術大会懇親会后, Neil H Shear先生を囲んで(2017年)

帰国そして主任教授就任

帰国後は主に横浜市立大学附属病院と同市民総合医療センターに所属しましたが、その途中で4年間は小田原市立病院に勤務し、地域の中核病院の視点で大学附属病院をみることができました。薬疹の研究では先述の池澤先生のご指導のもと、重症薬疹の死亡率の低下と後遺症の軽減を目指し、それがライフワークとなりました。厚生労働省の重症薬疹の研究班にも加えていただき、参加されている諸先生の個性がぶつかり合う遠慮のない議論は大いに勉強になりました。また、アトピー性皮膚炎や痒みのメカニズムについて大学院生たちと動物モデルを用いた研究や臨床研究を進め、さらに食物アレルギーに関連する研究班にも加えていただき、アレルギー研究の世界がさらに広がっていきました。なお、帰国の翌年、大学附属病院の移転に際して医局長を務めたことは、後日病院組織を効率よく動かすうえでのよい経験になったと思っています。

市民総合医療センター部長、大学准教授、病院教授を経て、2011年に主任教授に就任しました。横浜という立地にも恵まれて新入医局員も大学院生も確実に入ってくる中、教室員がそれぞれの力を発揮して薬疹はもとより膠原病や乾癬、食物アレルギーの研究を進展させてくれました。また、私が院内の業務で多忙を

極めたにもかかわらず、日本皮膚科学会東京支部長や日本医療研究開発機構(AMED)研究班の班長等の役割を果たすことができたのは、教室の人たちの多大な協力あってのことと感謝しています(図1, 2)。なお、私の退任時に准教授だった山口由衣先生、猪又直子先生は、その後ほぼ同時に2つの大学の主任教授に就任されました。

III. 附属病院長時代(図3)

主任教授に就任後、副病院長を3年間勤めましたが、その最後の年に病院長に推薦されてしまいました。病院の財政状況が急激に悪化し、課題が山積する中で「なぜ私?」と思いましたが、「副」の付かない立場で違う景色をみてみたいという思いもあり、好奇心の赴くままにまずは1期2年「やってみよう!」と決心しました。就任後に女性の大学病院長は極めて珍しいことがわかり(少なくとも全国で1999年以降初)驚きましたが、ロールモデルがいらないことはむしろ幸いで、とくに気負うこともなく、前任者のやり方にこだわることもなく、自分のスタイルでやっていこうと決めました。まずは各部門のスタッフと誠実に対話することにより信頼関係の構築を図り、そのうえでスピード感をもって改革を進めようと考えました。その際、運営においては基本方針を自分の中で次のように定めま

した。1. 常に考えるのは将来最適(現在の最適のために将来の発展を犠牲にしない)、2. 多方面からの情報収集と多角的な評価(幅広い視点で評価する)、3. 決断と行動はタイムリーに(いつ動くべきかを見極める)の3つです。幸い若手・中堅によるエネルギッシュな活動とそれを支えるベテランの協働が機能し、就任2年目以降には財政再建による黒字化および新しい医療の展開等、病院機能の強化を進めることができました。一方で、期待した成果があげられず、改革半ばで引き継いだものもありました。その原因は改革に

ついての現場の心理的抵抗に私が気づけなかったから、また改革のスピードに現場の意識改革が追いついていなかったからと分析しています。後にその経験は学長としての大学運営に大いに役立つことになりました。

結局、病院長として2期4年務めることになりましたが、最後に大仕事がありました。2020年2月、コロナ患者を満載したクルーズ船が横浜港に入港し、横浜市立大学附属病院は重症者や合併症のある患者を中心に受け入れることになりました。その後パンデミックも始まって、病院のスタッフにとっては嵐の中を進むような2カ月になりましたが、それまでに培った「病院の医師、コメディカル、事務職員が一体となって困難に立ち向かう」という姿勢に大いに助けられました。

IV. 学長時代

コロナ禍の始まる前年の2019年秋、改革の姿勢が評価されたのか、次期学長候補に推薦されてしまいました。就任すれば定年を待たずに医学部を退職することになり、まさに「青天の霹靂」でした。そもそも全学部を統括する学長が自分に務まるのか?という思いがありましたが「病院長にはできなくても学長ならできることがある!」と思い至り、次の「やってみよう!」につながりました。何をしたかったかというと、



図3 病院長時代。副病院長、手術室部長と中央手術室にて(2017年)

高い研究力を有する強い大学づくりです。結局、自信はないのに自信ありげなプレゼンが功を奏したのか、学長に選出されてしまいました。後に、医学部のある国公立大学で初の女性の学長と知り、わが国のジェンダーギャップに改めて驚きました。

就任時、もっとも重要な学長業務は、いうまでもなくコロナ禍で大学と地域医療を守ることでした。地域医療では行政のコロナ対策への協力に加えて横浜市内に計画されたコロナ専門病院の立ち上げと医師・看護師等の派遣を担うことになりました。病院や医学部に大きな負担をかけましたが病院長と連携し、大学時代の同級生にも助けられて、コロナ終息後に閉院するまで大きな混乱なく乗り切ることができたのは幸いでした。

もう1つの重要な学長業務は、18歳人口が激減する中、大都市にある公立総合大学としての特長と存在意義を明確にすることです。県内に医学部を有する国立大学がないのを幸いに医学研究科、生命医科学研究科、データサイエンス研究科を中心とした高い研究力によるハイレベルな人材育成と研究成果の還元による地域貢献を目指しました。ここで生きたのが、組織を大きく動かすには「トップの思い」だけでは不十分で「皆の思い」とすることが不可欠という病院長時代の経験です。学内はもちろん設置自治体でも、文理医を問わず高い研究力をもつことが、公立大学の役割で

ある地域の活性化に大きく貢献するとアピールし続けました。幸い中堅教職員の活躍で大型の公的資金を複数獲得でき、それにより産学連携研究施設の建設や研究支援人材の新規採用、データサイエンス学部の倍増計画など、さまざまなプロジェクトが動きだし、学内の気運も高まりました。その結果、2023年度から新たに始まった大学の中期計画には、目指す姿として「研究の横浜市立大学」と明記され、退任した翌年度の2024年度には新学長のもと、「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業(J-PEAKS)」に採択されました。

一方、学外では公立大学協会の副会長と会長を務めました。文部科学省等での活動等を通して、公立大学は対象外と考えられていた研究基盤整備や医学教育に関する大型の補助金に応募できるようになったことは大きな成果と思っています。

おわりに

こうして振り返ってみますと、恩師や先輩、教室

や病院、大学の人たち、そして家族に励まされ、助けられてきたからこそ、歩めた道と改めて思います。

これまでの管理職としての道のりで一貫したモットーは、置かれた立場で「すべきことから逃げてはいけない」です。それが、最初は懐疑的であった人も含め、多くの人が陰に陽に力を貸してくださったことにつながったのではないかと思います。一方、自身の力不足や限りある時間の中でできなかったこともたくさんあり、それらの多くは後任や次世代の人たちに託すことになりました。

退任したいま、自分が「すべきこと」は、積んできたキャリアから得た経験を社会に生かすことと、「やってみよう！」の精神をもつ人たちを温かい心で応援することだと思っています。